

千刈狸の呟き

先日、たまたま知り合いの御夫婦と、とある喫茶店のカウンターで同席した時の話である。久し振りに、懐かしい話やこれからの催し物の事など話し込んでいると、修験者の法衣を着た男性が、小走りにやって来て、カウンター越しに、マスターに尋ねた。

「すみませんが、この辺にポチ袋を売っている所はありませんか？」

「ポチ袋ですか？少し行った所にコンビニがありますけどね。」

と答えると、

「いやあ、今、運転手さんに御礼しようと思っている所なんです、困ったなあ。」

どうしたらいいのかな、と考えていたら、私の頭の中には、ティッシュペーパーか小さい包装紙にくるまれた御札がチラチラしてきた。すると、ピアノ教室をやっている奥さんが、

「小さいのでよければ、持っていますよ。」と赤熨斗のポチ袋を、カバンの中から取り出して手渡した。

「凄い！」私達は叫んでしまった。劇的展開。

「ありがとうございます。出羽三山を回って鳥海山に来て、こんな御縁を頂くとは有難い事です。」

深々とお辞儀をして帰り際に、

「むき出しで申し訳ないのですが、ほんの気持ちです。」

と百円玉を置いた。

「あら、だめですよ、これはいただけませんから…」といっても受け取らずに仲間達の方へ走って行ってしまった。小さなドラマを見たようで、奥さんに、いつもポチ袋を持ち歩いているのですかと尋ねたら、

「仕事柄、ちょっと御礼をしたり、一緒の方が使いたい時に差し上げたり、結構重宝しますよ。」

～ポチ袋～

月影の狸

との事。いいなあ、日本のちょっとした文化、心使いに、改めて感心した。

そもそもポチ袋のポチとは、関西の方で、舞妓さん達にあげる心ばかりの御祝儀のことで、「ぼちっ」と「これっぼっち」からきたという。フランス語の「プチ」から来たとするかなり無理矢理な俗説もあるらしい。また、ポチ袋に入れる御札は出来れば新札が良く、折り方も四つ折りは縁起が悪いので三つ折りにするという習わしもある。

昔、十二月に入るとお年玉袋を持参する製菓メーカーが結構あり、お年玉と書いてあったり、その年の干支が印刷されていたので、未だに使用できるほど在庫がある。大分前に、関西に本社があるメーカーが、

「いつものポチ袋です。」

と言った時、それ何の事と初めて聞いてその名前を知った。この辺ではお年玉袋か赤熨斗袋である。

調べてみると、若い人達の間でも地味に流行していて、ちょっとした会費や借りたものを返す時などに、工夫を凝らしたものを使っているらしい。定番の赤熨斗でないものを見たら、つい笑ってしまった。自由な発想で面白い。

「例のモノ」「口止め料」「下心ばかり」

「天下の回りもの」「20%増量中」「返金可」

「おまたせしました」「分割払い」など。

帰り際、ピアノの先生は、「ちょっといいこと思いついたの。」と入口付近の「募金箱」の所へ行き、さっきの百円玉をポトリと入れて、ニッコリと微笑んだ。まさに、天下の回りもの。

そういう訳で、私のカバンには、いつも三枚のポチ袋が入っていて、何かご縁があれば、ポチっと活用してみたいと思っている。